

平成22年6月

平成21年度 川崎市市民ミュージアムの 運営・活動に関する評価報告書

川崎市市民ミュージアム運営・活動評価委員会

※資料

- 川崎市市民ミュージアム運営・活動評価委員会（評価委員会）の開催経過
- 評価委員名簿

1. 総評

2. 21年度 重点項目、展示上映評価シート

（内部評価・評定意見・評定）

※資料

○評価委員会の開催経過

- 平成21年 3月25日：20年度第3回委員会
 - ・21年度評価シート（案）の審議・承認
- 平成21年 7月10日：21年度第1回委員会
 - ・評価シートに基づき20年度の事業・活動を評価
(21年8～9月に20年度評価結果を教育長、砂田副市長、市長に報告した後、ミュージアムのホームページで公表)
- 平成21年11月 4日：21年度第2回委員会
 - ・21年度上半期進捗状況と自己評価の中間報告
- 平成22年 3月25日：21年度第3回委員会
 - ・評価シートに基づき21年度の事業・活動を評価

○評価委員名簿

●川崎市市民ミュージアム運営・活動評価委員会 委員

委員名	現職	備考
今村 有策	東京都参与／トーキョーワンダーサイト館長	
内田 欽三	専修大学経営学部教授	副会長
大月 ヒロ子	有限会社アイデア 代表取締役	
草壁 悟朗	川崎信用金庫専務理事	
小林 美和	市民ミュージアム協議会委員	
杉長 敬治	京都工芸繊維大学研究推進本部教授	会長
林 容子	尚美学園大学芸術情報学部准教授	
宮澤 壯佳	池田満寿夫美術館顧問（元美術手帖編集長）	

(五十音順 敬称略)

総 評

川崎市において川崎市市民ミュージアム（以下「市民ミュージアム」）の在り方が検討される中で、市民ミュージアムの平成21年度の事業運営については、館長を始めとする全てのスタッフとボランティアなど直接館を支援する関係者の努力と外部の多くの支援者の力により、多彩な展覧会事業が実施された他、教育普及やイベントでも多くの成果がうまれた。工夫と改善の余地がある事業運営がまだ見受けられるが、全体として評価できる。

市民ミュージアムを所管する川崎市の担当部局については、平成22年度から川崎市教育委員会から市民こども局に移管されることになった。移管は、市民ミュージアムが、これまで以上に市民と市民が行う諸活動に貢献できるミュージアムになっていくこと、地域の芸術文化や産業・観光等の振興を図っていく拠点として大きな役割と機能を発揮することを期待して実施されたものと考えられる。

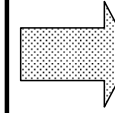
現在、我が国は、変革の只中にあり、博物館・美術館の在り方も根底から問われている。市民ミュージアムが、所管部局の移行を契機に、更に改革を進め、その使命（ミッション）と目的を再確認し、市民の期待に積極的に応えていくことを期待したい。また、事業運営に当たっては、市民や市内外の各種の機関・団体との連携を十分図り、市民ミュージアムの情報発進力を高め、自らの存在意義を高めていくことを期待したい。

21年度 重点項目評価シート

市民ミュージアムは
 ●市民に親しまれる川崎発の市民文化の伝承と創造の発信拠点
 ●ミュージアムの機能や川崎の持つ個性と魅力を活かし全国に発信
 ●効率的な運営のミュージアムと、地域の活性化に貢献できる拠点を
 目指して



改革のための諸事業を
 ●市民参加型の幅広い活動
 ●美術館・博物館としての基本的役割と活動
 ●川崎市を全国に発信し、市民にアピールできる活動
 の3層構造で整理し



この活動を定着していくための第1ステップとして、以下の目標を達成していく
 ●活動目標
 ・独自性の確立
 ・地域に根ざした存在
 ・賑わいと活気のあるミュージアム
 ●運営目標
 ・資産の有効活用
 ・運営の健全性の保持と効率化
 ・人にやさしい環境づくり

3段階評定
 A: 目標を十分に達成し、成果をあげている
 B: 目標を概ね達成している
 C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

	21年度の重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		評価
			事業実績	成果と課題	主な評価視点	評定意見	
第1層 市民参加型 の幅広い活動	●教育普及活動の充実 ・教育普及担当の新設により、活動・受入れ体制を強化 ・市民ミュージアムの特徴を活かした普及プログラムの実施 ・学校向け普及プログラムの内容を充実 ・学校連携展示会の開催増 ・市内小中高校の児童・生徒を主な対象に教育委員会として取り組む星野富弘展の開催	・参加者(学校、市民)、来館者の拡大 ・対象を的確にとらえた教育普及活動 ・参加者、参加校の反応の掌握と次年度に向けての計画的な企画の立案	・歴史講座、古文書講座、大山街道を歩くツアーなどを定期で実施したほか、企画展にあわせて講演会・遺跡めぐり(縄文展)、提灯やキャンドルをつくるワークショップ・燈火落語会(灯りの情景展)などを開催。 ・おやじdeミュージアム、ベツスタープロジェクトなど外部団体と協働した普及プログラムを立案・実施。 ・ミュージアムの各ジャンルでの体験コースを増やすなどスクールプログラムを充実させ、市内公立・私立学校の全教職員に利用案内を配布した。利用数(館内利用及び出張)は2月末まで53校2949人(前年27校880人)。 ・社会科推進事業の利用数は91校9457人(前年86校9140人)。これまでの座学に加え民具体験学習を導入。 ・スクールプログラム、社会科推進事業を利用の児童・生徒に、家族で企画展を閲覧できる招待チケット"家族でGO"を配布。配布数1万枚で回収は183枚276人。 ・企画展示室で創造する子ども展(入場者3975人・前年3867人)、市立中学校造形展(1861人・前年1641人)、ミュージアムギャラリーで中学校技術・家庭科作品展(550人・前年700人)、教職員研究美術展を開催。また今年度より、ミュージアムギャラリーで市立中学理科作品展を8日間の会期で開催(922人が来場)。 ・星野富弘展は20日間の開催で入場者数13271人、内学校事業として観覧した児童は1535人。	【成果】 ・新たに担当を設置して職員を配置したことにより、これまででない取り組みや内容の充実を図ることができた。 ・地域団体との協働や学校連携の拡大は、外部に対するミュージアムの活動のアピールと利用者増に貢献した。	●「地域に根ざした存在」になったか ●「賑わいと活気のあるミュージアム」に貢献したか	教育普及担当職員(1名)を配置したことや教育プログラムのためのボランティアを組織したことにより、教育普及活動の内容のレベルアップと教育普及活動を外部へ周知するための取り組みが始まったことを評価する。 市民との協働によるプロジェクトや地域に根ざした事業が実施され、市民ミュージアムのにぎわいをつくる上で貢献した。 また、次世代を担うことも達が市民ミュージアムに親しむ上で、戦略的な取り組みが大いに期待される学校教育との連携については、市内の小・中学校との連携が進み、平成21年度の小・中学生を対象にした「スクールプログラム」の参加者数が20年度に比べ約3倍になるなどの進展が見られた。	A
	●ボランティア組織の定着と拡大 ・登録者拡大施策の強化 ・自主性、やりがいが高まる業務の付託 ・館との定期的な情報交換	・登録者の拡大 ・事業の運営やレクチャーにも参画する体制の構築 ・館長をはじめとして、館スタッフとの交流を定例化	・年度初めの募集で26名が新規に登録。前年とあわせ現在登録数51名。 ・今年度より社会科推進事業でボランティアがレクチャーする子どもたちの民具体験を始める。 ・“昔のくらし 今のくらし”では毎週日曜日にボランティアによる“昔の遊び体験コーナー”を開催。 ・12月からボランティアの参画によりレストランで“ママカフェ”を開始。 ・従来の見学サポート、イベントサポートに加えて、来年度から新たに企画・運営グループを立ち上げ、活動の幅を広げること決定。	【成果】 ・ボランティア導入により、館の活動の幅がひろがるとともに質の向上を図ることができ、来館者のミュージアムに対する理解を深めることができた。 ・日常的な活動の中に外部視点が入ることで、来館者対応の改善の契機となった。		市民ミュージアムのボランティア制度は、開館当初から取り組まれたものではない。市民ミュージアムの改革の必要性が各方面から指摘され、新たな取り組みが行われるようになった平成19年度に、ボランティア制度が創設され、平成21年度末で3年間が経過したところである。遅い導入ではあるが、21年度末で、ボランティアスタッフは約50名になり、ボランティアによって行われる活動は、着実に範囲を広げつつある。現在、ボランティアは、小学生の展示見学やイベントでのサポート業務に従事し、市民ミュージアムの事業運営にとって欠くことのできない存在になっている。短期間の間に、市民ミュージアムがボランティア制度を整備し、多くの方が活動をされていることを評価したい。	A
	●かわさき市美術展の開催 ・アートガーデンから会場を変更 ・本年度の改善に向けて、市美術展のあり方を市民文化室と検討	・市民文化室に協力して開催 ・来年度以降の新たな市美術展の提案	・これまでの市美術展からの改善点 ①長期にわたり任にあった審査委員を一新。 ②部門別で2期にわかれていた会期を通期で開催。 ③従来”日本画・油彩・水彩・版画部門”にグラフィックを加える”平面(日本画・油彩・水彩・版画・グラフィックなど)部門”とする。 ④川崎市内在住・在学の中学生、高校生を対象とした中高生部門を新設。 ・応募者数309人(前年274人)、応募点数498点(同455点)、入場者数7829人(同2500人)	【成果】 ・美術館施設での開催で展示作品の見栄えが格段に良くなったこと、1回の来場で入賞作品をすべて鑑賞できることが出品者、審査員から好評を得る。 ・市美術展の来館者、市美術展以外の企画展・映画・イベントなどが目的の来館者、それぞれ相互に市美術展、ミュージアムの存在を認知し相乗効果があった。		市民ミュージアムのミッションである「市民の文化・芸術活動の振興を図って川崎市を全国に発信し、あわせて活動の基盤となる資料・作品・情報を収集・保存し、それを次世代に確実に伝えていくこと」を実現していくためには、市民の主体的な参画を得ることが不可欠である。市民参画の実現の上でも、ボランティア制度の充実、市民ミュージアムにとって極めて重要な意義をもつ。市民参画の方法としてボランティア制度が機能していくためには、ボランティアが主体的にミュージアムの活動に参加できること、ボランティア活動を通して自らのスキルを向上させることができる環境が醸成されていることが重要である。また、館とボランティア、ボランティア相互間で円滑なコミュニケーションを図ることができるシステムが構築できていることも重要である。ボランティア制度が発足して4年目を迎える平成22年度においては、これらの点においても、進展が図られることを期待したい。	B

	21年度の重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	主な評価視点	評価意見	評価
第1層 市民参加型の幅広い活動	●市内外の外部団体との連携強化の深化		<p>・市民活動団体「おやじの会」と連携して、遊びの工作などのワークショップ「おやじDEミュージアム」を開催。参加者150人、おやじ連55人。</p> <p>・多摩美術大学、川崎総合科学高校と連携し「ペットスタープロジェクト」を実施。</p> <p>・星野富弘展において、小杉駅周辺開発事業に関わる企業を中心に20の企業・団体より150万円の協賛金を得て広報等に充当する。</p> <p>・川崎・エジプト親善協会、多摩川野焼き土器づくりの会、神奈川県高等学校文化連盟などの展示会を開催。</p> <p>・“灯りの情景展”でのデザインフォーラム(経済労働局)、毎日映画コンクール授賞式の川崎開催に連動した受賞作品上映(総合企画局)など他局と連携した事業を開催。</p> <p>・川崎のガラス産業振興の取組みの一環として、経済労働局との連携により22年度に東京ガラス工芸研究所(川崎区)を中心としたガラス作家展を開催。</p>	<p>【成果】</p> <p>・昨年度に引続き機会を捉えて各種団体との連携を志向したことにより、市民ミュージアムの活動の理解と認知の拡大を図ることができ、集客にも貢献した。</p> <p>・「おやじの会」「東京ガラス工芸研究所」など新たな連携先を確保したことにより、事業の活動の幅を広げることができた。</p> <p>【課題】</p> <p>・これまで関係を築き上げてきた団体との連携の深化に加え、新たな団体も視野にいれ中長期的な視点で方針を定めて取り組んでいく。</p> <p>・企業への働きかけを実行して協賛金確保に結びつけたが、受入れの仕組みの整備が必要。</p>	<p>●「地域に根ざした存在」になったか</p> <p>●「賑わいと活気のあるミュージアム」に貢献したか</p>	<p>我が国の国公立の博物館・美術館の多くは、伝統的に外部との連携協力や交流に余り積極的ではなかった。市民ミュージアムにも、その傾向が見られた。市民ミュージアムは、これまでの方針を転換し、市民に親しまれる活動を積極的に実施することや地域の活性化に貢献することを館の重点事業として位置付け、市内外の外部団体との連携に取り組み始めた。その結果、平成21年度には、市内の大学・高等学校との連携による「ペットスタープロジェクト」などが実施されるとともに、市民活動団体や企業等との連携が進み、市民ミュージアムの認知度や活動への理解が深まりつつあることを評価したい。</p> <p>今後、川崎市内の各種団体や文化関連NPOはもとより、様々な産業や企業、他の博物館・美術館、地域の小学校、中学校、高等学校や大学との連携を図り、市民ミュージアムのネットワーク力が強化されることを期待する。</p> <p>そのためには、連携の窓口となる市民ミュージアムの組織の整備、連携を促進するために必要な市民ミュージアムのリソースの開発、館員の館外活動の促進や関係団体との連絡協議会の開催等の取り組みが積極的に行われることが望まれる。</p>	B

	21年度の重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	主な評価視点	評価意見	
第2層 美術館・博物館としての基本的役割と活動	<p>●改革の検証と以後の管理・運営体制の検討</p> <p>・本庁関係部局、生涯学習財団とともに検討</p>	<p>・サマー・オータム各レビューに検証・計画を上程</p>	<p>・教育委員会の検討プロジェクト(総務部、生涯学習部、文化財課、生涯学習財団、市民ミュージアム)での論議を経て、現在は庁内の改革プロジェクト(総合企画局、行財政改革室、市民文化室に文化財課、市民ミュージアム、生涯学習財団)で検討中。</p>	<p>【成果】</p> <p>・21年度サマーレビューでは、施設整備の今後の方向性を上程し、映像関係の改修、空調改修調査に予算がつく。</p> <p>【課題】</p> <p>・これまでの改革の検証と22年度からの市民こども局移管を踏まえ、22年度中に「市民ミュージアム第2次改革」の策定を目指し、23年度からの市の実行計画に盛り込むべく関係部局と作業を進める。</p>	<p>主な評価視点</p>	<p>当面の懸案事項のひとつであった空調設備大規模改修の設計委託・映像関係の改修予算の措置が決定されたことは、市民ミュージアムの今後の運営を考える上で大きな意義をもつものであり評価したい。</p> <p>市民ミュージアムの管理運営体制の在り方については、川崎市の改革プロジェクトで検討が行われ、所管部局の移行がとりまとめられ、平成22年4月から市民ミュージアムの所管部局は、教育委員会から市民こども局へ変更された。今後、22年度中に、「市民ミュージアム第2次改革計画」の策定を目指すことになっている。</p> <p>我が国の社会が大きく変化し、博物館・美術館を取り巻く環境が変化している中で、博物館・美術館が果たすべき役割、機能についても大きく変化しているにもかかわらず、使命(ミッション)や目的の見直しが行われず、設立時のままで、時代遅れになっている事例が数多く見られる。</p> <p>市民ミュージアムの所管部局が変更されたことを契機に、市民ミュージアムの使命(ミッション)と目的を再確認し、市民ミュージアムの将来像を改めて描く作業が行われることを期待したい。市民ミュージアムが、時代と社会の要請に的確に対応できるように、市民ミュージアムと川崎市においては、館の使命(ミッション)と目的を再確認し、他館にはない市民ミュージアムの個性を明確にし、館のレーゾンデートルを今日のなものに再定義されることを期待したい。</p> <p>また、市民ミュージアムの運営に当たっては、細かな改善を厭わず、必要に応じて、大胆な改革を実行していくことを期待したい。同時に、ミュージアムが市民のものであること、市民の積極的な参画を求めていることを市民に周知し、市民の理解と協力を得ることについても、積極的に取り組んでほしい。</p> <p>川崎市には、市民ミュージアムの設置者の責務として、市民ミュージアムの使命(ミッション)と目的が十分達成できるように、必要な措置を積極的に講じることを期待したい。</p>	B
	<p>●運営体制の改善・整備</p> <p>・市の組織を教育普及担当、学芸担当、企画広報担当の三担当に再編し、三層構造各層実現の責任分担を明確化</p> <p>・会議体のあり方を整理、改善</p> <p>・日常業務の管理・運営の分担と遂行状況について、生涯学習財団と定例協議</p>	<p>・業務遂行の意思決定と役割の明確化</p> <p>・各担当・職員間の情報の共有化</p> <p>・手戻りのない効率的な業務遂行</p>	<p>・事業実施の意思決定機関として事業調整会議を新設。館長を座長に各担当責任者9名で構成し月2回開催。</p> <p>・財団副理事長以下管理職3名、ミュージアム館長以下管理職3名幹部により、課題の共有と課題解決の連携のために月2回の定例会議を新設。</p>	<p>【成果】</p> <p>・事業調整会議は決定プロセスの明確化とともに、館内における事業内容等の情報共有化にも寄与。</p> <p>・財団との定例会議により、組織間の意思疎通と課題の共通認識を図る。</p> <p>【課題】</p> <p>・学芸業務の運営調整の円滑な進行を目的として22年度に新設する財団・ミュージアムの会議体を機能させる。</p>	<p>●「運営の健全性の保持と効率化」に寄与したか</p> <p>●「資産の有効活用」を図れたか</p>	<p>市民ミュージアムは、川崎市の直営館ではあるが、ミュージアムの中心的な業務である学芸業務は、市が所管する財団法人に委託される方式が採用されている。この方式が市民ミュージアムの経営・運営にとって最適なものであるか、今後とも、市民ミュージアムと設置者である川崎市で十分点検し、ミュージアムの運営に最も相応しい体制を構築してほしい。</p> <p>ミュージアムが活性化するためには、現場レベルで、館長のリーダーシップが発揮しやすい状態が確保されていること、組織内の風通しがよく、目標と情報の共有化が十分図られていること、迅速で柔軟な業務遂行が可能な体制になっていることが必要である。市民ミュージアムでは、館内の各種の会議を通じて情報の共有化を図り、組織を活性化していくための努力が行われ、効果があがりつつあることを評価したい。</p> <p>なお、会議方式は有効な方法ではあるが、会議の構成員になっていない館員への浸透をどのように図るかなどの課題がある他、会議運営そのものが常にマンネリ化・形骸化しがちである。このため、業務処理のプロセスの見直しや目標の定期的な確認、ミュージアム内部の評価活動のプロセスに組み込む等の工夫や、館員によるワークショップを定期的に行うことにより、常に組織の新陳代謝を図っていくことが重要である。</p> <p>市民ミュージアムが川崎市の顔となっていくためには、公立館であることから生まれる既成概念や悪しき前例主義にとらわれず、市民ミュージアムの利用者や市民の立場に立った、現場重視の館の運営が行われことが重要である。市民ミュージアムの職員の意識改革も更に進めていくことが重要である。</p>	B
	<p>●市民ミュージアム評価制度の定着</p>	<p>・評価結果を企画立案や業務遂行に反映する仕組みの構築</p>	<p>・20年度の評価結果は市記者クラブで発表し、ミュージアムのHP上で公開。</p> <p>・20年度の評価結果を受け、来年度に向けて企画展の在り方、受付・監視等の委託業務の精査、サイン整備などの検討を開始。</p>	<p>【成果】</p> <p>・20年度評価結果の公表により、市民ミュージアムの現状と課題が関係部門の共通認識となり、「第2次改革基本方針(案)」の検討論議に寄与。</p> <p>・企画展の内容、及び内容にあわせて広報活動、地域団体との信頼関係の醸成など、指摘事項の是正と深化に取組み、21年度事業計画に反映。</p> <p>【課題】</p> <p>・自己点検、自己評価を日常的な館運営や業務遂行に反映する仕組み作りや、評価委員への十分な情報提の方策。</p>		<p>市民ミュージアムでは、平成20年度から外部委員による評価制度が導入され、評価結果は市民ミュージアムのHP等で公開されている。また、市民ミュージアムでは、評価結果を踏まえながら業務運営の改善が行われている。不十分な点がまだ多数あるとは言え、評価活動は市民ミュージアムの改革を推進する上で一定の役割を果たしてきたと言える。</p> <p>平成20年4月に市民ミュージアムに評価制度が導入された後、博物館法の改正(同年6月)により、博物館の評価活動は法律レベルの制度として位置付けられた。博物館法の改正から2年が経過し、市民ミュージアムの評価制度は、制度導入・体制整備の段階から、評価活動の実質化を図る段階へ移行することが求められていると言えよう。</p> <p>市民ミュージアムの評価活動が十分機能し、評価活動の実質化が図られるためには、評価委員各自の評価活動が一層適正に行われることが重要であるが、評価委員には、物理的・時間的な制約もあって、自ずと限界がある。このため、市民ミュージアムの構成員が内部評価(自己点検、自己評価)活動にどれだけ能動的に取り組めるかが一層重要になってくる。市民ミュージアムの業務に係わっている全ての構成員(委託業務従事者やボランティアを含む)が、それぞれの業務についてPDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクルを確立すること、アンケート・モニター調査等による市民ミュージアムの利用者等の意見・要望の把握、活動成果が定量的・定性的の両面から十分整理され、成果と課題が十分開示されていることが、評価活動が実質化するための決め手になると考えられる。評価結果について、市民ミュージアム側でどのような対応をしたかについても十分整理し、対応できた点については公表していくことが望まれる。</p> <p>なお、外部委員による評価が効果的に行われたためには、市民ミュージアムの活動状況についての情報提供が質量の両面で充実していくことが必要不可欠であるので、評価委員への情報提供の在り方についても十分検討されることを期待する。</p>	B

	21年度の重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	主な評価視点	評価意見	
第2層 美術館・博物館としての基本的役割と活動	●施設・設備の有効活用 ・備品の一元管理や、館がもつ広報媒体の活用、人的支援など貸出し体制の整備 ・バックヤード・専門施設の使い方の見直し	・ミュージアムギャラリー他、貸館の利用拡大 ・管理表の作成と確実な運用 ・諸室・設備の稼動向上	<ul style="list-style-type: none"> 各担当がコントロールしていた展示室を始めとする諸室の使用スケジュール管理を総務担当に集約。 貸館事業も内容を含め事業調整会議決済として決定プロセスを明確にするとともに、館内の情報共有化を図る。 ミュージアムギャラリーの貸出しは7団体で前年3団体を上回る。日数の稼動率はミュージアムの主催展示が減ったため42%(前年55.4%)。 教育普及担当の新設に伴い、ほとんど活用されていなかった企画室を教育普及、ボランティアの部屋に変更。 	<ul style="list-style-type: none"> 【成果】 貸館の事業内容の館内周知が徹底され、スケジュール管理や案内などが改善される。 企画展示室の予約増や、映像ホール平日貸出しの実績増など貸館事業の認知が進展。 【課題】 ミュージアムギャラリーの稼働率アップのための体制を改善。 設備の老朽化やランニング予算がないため活用されていないアトリエ、スタジオ、録音編集室などの専門施設を機能変換や市民開放に向けて検討。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「運営の健全性の保持と効率化」に寄与したか ●「資産の有効活用」を図れたか 	<p>市民ミュージアムには、外部に開放できる施設・設備として、展示室、ギャラリー、映像ホール、アトリエ、スタジオ、録音編集室など多様な施設・設備が存在する。これらの施設・設備については、内部利用だけではなく、市民ミュージアムと市民、地域コミュニティとの関係を強化する観点から外部へ積極的に開放することが期待される。市民ミュージアムでは、平成21年度に、外部への貸出業務が円滑に行われるように施設・設備の一元管理や貸出しの決定が迅速に処理できる体制が整備され、貸出実績が増加したことを評価したい。</p> <p>市民ミュージアムの施設・設備が更に有効に活用されるためには、外部に向けて積極的な周知・広報を行うことが必要である。また、利用者を増加させるためには、定期的・恒常的な利用者(リピーター)を確保することが重要である。また、現時点では外部への貸し出しが行われていないアトリエ、スタジオ、録音編集室などの専門施設についても、市民への積極的な開放に向けて館内で十分検討が行われ、必要な措置が講じられる必要がある。施設・設備が広く活用されることを通じて、市民ミュージアムが多くの市民により身近な存在になるとともに、文化創造の場になることを期待する。</p>	B
	●収蔵品の活用を継続		<ul style="list-style-type: none"> 市民ミュージアムのコレクションをより効果的にアピールする展示・館外貸出しを実行。 企画展「幕末・明治期の川崎とニッポン展」「川崎・縄文・一万年展」「灯りの情景展」は当館収蔵の資料を中心に構成。「幕末・・・展」「灯り・・・展」では博物館資料に加え、古写真や錦絵、風刺漫画など美術系の収集資料を加えて展示構成。 ミュージアムでグラフィックの出張展示、当館収蔵品を中心した茨城陶芸美術館での「濱田庄司展」のほか、東急文化村等で開催の「ロートレック展」、ニューオータニ美術館と連携した「安田靉彦展」では当館収蔵品が展示構成の主要な部分となっている。 映画の定期上映でも毎月テーマの中に収集フィルムを入れ込んでプログラムを構成。 大島渚のテレビドキュメンタリー15作品をすべて公開。 来年度オープンする柿生中の郷土資料室に、所蔵の考古資料を教材・市民公開のために貸出し。他に鷺沼小、河原町小に考古資料を教材として貸出し。 	<ul style="list-style-type: none"> 【成果】 テーマに沿って他ジャンルの収集資料を適宜展示することにより、展示テーマの理解の助けとなるとともに、市民ミュージアムの特徴をいかした企画内容となる。 外部に対して市民ミュージアムの存在と収蔵作品の質の高さをアピール。 映像関係の研究利用者が増加。 【課題】 狭隘となりつつある収蔵庫のスペース確保。 収集資料のアーカイブ、データベース化を総合的に計画化。 		<p>博物館、美術館、映画館の機能をあわせもつ、極めてユニークな存在である市民ミュージアムは、多種多様な収蔵品を収蔵している。また、主な所蔵品については、インターネット上で公開している。</p> <p>市民ミュージアムでは、収蔵品を有効活用するために、館内で多様な展示・上映を行うとともに、市内の文化施設での出張展示や市内の学校へ収蔵品を教材として貸し出している他、他館への貸し出しも積極的に行っている。この点については大いに評価したい。</p> <p>市民ミュージアムの収蔵品は、市民だけではなく、日本国民、人類の貴重な財産である。この財産が有効に活用されるためには、収蔵品が明確な方針の下収集され、適切な保存環境で保存され、魅力的な展示を通じて広く公開されることが必要不可欠である。館の収蔵品を戦略的に活用して、国内外の博物館・美術館等と連携し、優れた展覧会(交換展)を企画・実施することが大いに望まれる。</p> <p>また、館の収蔵品のマネージメントが機能するためには、現在、館で検討されている収蔵品(収集資料)のアーカイブ、データベース化が今後計画的に推進される必要がある。</p> <p>市民から市民ミュージアムにご寄贈をいただいた一大コレクションの展覧会(「灯りの情景展」)が平成21年度に開催されたことは記憶に新しい。資料の寄贈や寄託を進める上でも、狭隘となりつつある収蔵庫のスペースの確保と収蔵庫の保存環境の改善が急務である。この点については、できるだけ速やかに検討が進められ、必要な措置が講じられることを期待する。</p>	B

	21年度の重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	主な評価視点	評価意見	評価
第3層 川崎市を全国に発信し、市民にアピールできる活動	<p>●独自性や話題性・集客性のある企画の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サンデー・マガジンのDNA展、ハービー山口展、星野富弘展など ・ペットスタープロジェクト 	<ul style="list-style-type: none"> ・市民ミュージアムの特徴、機能を活かした企画 ・入館者の対前年プラス 	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の集客を期待した企画展である「サンデー・マガジン展」「ハービー山口展」「星野富弘展」がいずれも動員目標を下回る中、挽回のためにイベントや広報で掘入れをした「昔の暮らし 今の暮らし」が大幅にプラスとなる。 ・映画上映は「松本清張生誕100年」「江波杏子」「岡本喜八」の特集や、ミュージアムで復元した戦時中の貴重な記録映画「セレベス」などにより集客を図る。 ・普及事業として開催した「ペットスタープロジェクト」は8～9月の約1ヶ月間巨大オブジェを中庭に展示。 ・「昔の暮らし 今の暮らし」の関連企画として、話題づくりをねらい昭和38年の川崎市小学校の“給食”を復元しレストランで毎日提供。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集客目標を館全体で達成する意識により、普及活動、関連イベントでも集客実績をあげることができた。 ・漫画、映像の事業展開で館の特色をアピールするとともに、教育普及関係の展覧会、市美展の開催により“市の美術館”としての役割を果たす。 ・ペットスターは夜間イルミネーションが話題となり、ヤフーのトップページや読売新聞に掲載。夜間に相当人数が観覧。 ・給食提供はテレビ朝日の朝ワイド(全国ネット)で放送されたほか、新聞、ラジオ、タウン紙など多くの媒体に取上げられ大きなPR効果があり、集客面でも貢献した。 ・フィルム「セレベス」の復元上映も新聞、ラジオの取材により、遠方からの集客も多く映像事業のアピールとなる。 ・2月にはテレビ朝日「ちい散歩」でも市民ミュージアムが取上げられる。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画の質の向上とともに、目標を達成するための内容の工夫、広報展開を館全体の論議として今後も継続。 	<p>主な評価視点</p>	<p>市民ミュージアムのもつ多様なリソースを活用して、「独自性」「話題性」「集客性」のある企画を実施することは、今後の市民ミュージアムの運営にとって極めて重要な意義をもつ。地域の文化・芸術振興の核・拠点になるためには、市民ミュージアムの「企画力」「情報発信力」と「人々を結びつける力」が問われる。</p> <p>平成21年度に、市民ミュージアムでは、多様なジャンルにわたって、多くの展覧会、映画上映、イベントが実施され、内容面でも独自性や話題性のある企画を実施されたことを評価したい。また、「ペットスタープロジェクト」のように、他の機関・組織と連携協力して実施された企画が行われたことも評価したい。</p> <p>一方、集客を期待して開催された展覧会が予定していた集客数を確保できなかった事例が見られた。</p> <p>観客が求めているものが高度化・多様化し、館のコレクションをこれまでの方法で展示するだけでは、入館者の確保は難しくなっている。市民が見たい展覧会の実現とともに、展示方法・展示解説の工夫、展示に付随する多様な企画の実施がますます重要になっている。市民ミュージアムには、展示企画の充実と斬新な展示方法・展示解説、展示空間の創出を期待する。館の財政事情は厳しいと思うが、館と館員の企画力や展示を高度化するための投資を惜しむことのないように十分留意してほしい。</p> <p>また、館の企画力を高めるためには、他の博物館・美術館や大学、アーティスト等と積極的に連携することが必要である。有能なゲスト・キュレーターを登用し、展覧会を活性化させることも重要である。</p> <p>なお、企画内容の充実とともに、企画の周知・広報が重要であることは言うまでもない。「展覧会のちらしを見る機会が少ない」との指摘もある。限れた予算の中で、どのような方法で効果的な広報を行うか、インターネットの利用も含めて更に検討が行われ、現状が改善されることを期待したい。</p>	B
	<p>●広報体制の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的な広報会議開催による計画的な広報展開 ・メディアへの働きかけの強化 ・ホームページのシステム・内容の改善 	<ul style="list-style-type: none"> ・メディアへの露出増加 ・HPアクセス数の対前年プラス ・集客に貢献する媒体展開 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペットスタープロジェクト、給食の再現提供、貴重な記録映像「セレベス」の復元上映など話題性のある事業をメディアに対して反復してアピール。 ・HPのデザインを改善。ページビュー4月～2月末までで761,341(前年558,458)、ビクター数97,541(同75,195) ・広報の新たなチャネルとして市内の郵便局94局、JAセレサ川崎38店舗にチラシ・ポスターを定期的に掲出するルートを開発。 ・市美展の広報で、南武線小杉駅改札にフロア広告の掲出を試行。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市の事業に参画することにより、庁内での存在感の向上。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映画大学との協力の具体策を立案。 	<p>●「独自性の確立」となったか</p> <p>●「賑わいと活気のあるミュージアム」に貢献したか</p>	<p>市民ミュージアムでは、平成21年度に、館独自の企画を、マスコミに反復してアピールすることにより、全国ネットのテレビ番組や主要新聞に取り上げられるなどの成果があがったことは大いに評価したい。また、川崎市内の広報は、戦略的・組織的な広報活動が行われてきたとは言いがたい状況にあったが、市民ミュージアムを市民にアピールするための取り組みが次第に実行されつつあることを評価したい。</p> <p>現在、博物館や美術館では、新聞社等と共催した展覧会の場合には、新聞社等により広範囲に及ぶ広報が行われるのが通例になっている。一方、館独自の展覧会では、自力で広報を行わなくてはならないので、独自の広報戦略と広報体制をもつ館ともっていない館では、広報力に大きな差が生じている。</p> <p>市民ミュージアムでは、事業内容が多岐にわたっていることもあって、様々な広報資料が作成され、館の内外で配付されている。広報資料の多さは、市民ミュージアムの規模では類を見ないと言ってよい。また、館のHPも様々な工夫が施され、公立館では質が高い。</p> <p>一方、多種多様の広報資料の作成に多大なエネルギーが費やされ、多くの業務を抱える館員には負担になっていると思われる。また、これらの資料が、館の利用者や市民にどのように行き届いているのかも気になる。今後、広報資料が利用者にとどのよう活用されているか等について十分検討の上、広報資料を精選・重点化し、配付方法を更に工夫することが望まれる。また、紙媒体とインターネット上のコンテンツを更に共有化を図ることにより、コンテンツの効率的な使用を促進することも望まれる。</p> <p>市民ミュージアムとその事業を多くの人々に認知してもらうためには、これまで以上に戦略的な取り組みが求められている。市民ミュージアムの事業が多岐にわたっていること、広報に充てるリソースが限られていることを考慮すれば、館がアピールしたい事項を絞り込み、重点的にアピールする手法(「選択と集中」)を取り入れることが必要であろう。展覧会事業については、地元のミニコミ誌やコミュニティサイトへの配信など地域密着型の媒体や新聞の他に、NHKの「日曜美術館」や美術ファンが多く見る雑誌等にも取り上げられるように積極的に取り組む必要がある。川崎市や神奈川県内だけでなく、首都圏全域からの集客を期待する事業については、プレス用の広報資料の作成や内覧会の実施などに積極的に取り組むことが望まれる。</p> <p>また、インターネットなどの情報通信技術が、我々の予想を超えて、飛躍的に拡大・深化している。インターネットの特徴(速報性、双方向性、動画の活用等)を十分生かした情報発信に一層の努力と創意工夫を期待したい。とりわけ、若い世代向けの企画では、重点的に取り組むことが望まれる。</p>	B
	<p>●映像のまち・かわさきとの連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推進拠点としての役割を果たす ・映画大学開校に向けての協力 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係部署・施設とのネットワークの構築 ・市民ミュージアムとしての映画大学への協力提案 	<ul style="list-style-type: none"> ・市の支援事業である毎日映画コンクール表彰式の川崎開催に運動して、2月の映像ホールにおいてはドキュメンタリー部門の本年度及び過去の受賞作品を特集上映。 ・市と映画学校との間で締結した確認書に、映画大学と市民ミュージアムとの間で、共同研究、図書資料の相互貸出し、博物館実習などの協力関係の構築を盛り込む。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市の事業に参画することにより、庁内での存在感の向上。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映画大学との協力の具体策を立案。 		<p>別紙のとおり 毎年「しんゆり映画祭」が行われている川崎市麻生区に、平成23年度には「日本映画大学」(仮称)が設置されることになっている。川崎市は、映画産業の振興によるまちづくりを市政の重点施策のひとつとしている。</p> <p>昭和63年の開館以来、映画に関する資料を収集し、館内で定期的に映画作品を上映し、映画に関して実績をもつ市民ミュージアムには大きな期待が寄せられている。平成21年に「日本映画大学」を設置する学校法人と川崎市の間で締結された確認書において、映画大学と市民ミュージアムとの間で共同研究、図書資料の相互貸出等の協力関係を構築することが盛り込まれている。今後、協力の在り方が具体的にになっていく中で、市民ミュージアムに寄せられている期待に着実に応えていくことが望まれる。</p> <p>市民ミュージアムにおいては、日本映画大学(仮称)との協力を契機に、映画に関する事業を一層充実し、我が国の映画産業の振興に貢献することを大いに期待したい。</p>	B

21年度 展示・上映評価シート

展示名	担当	目標		数値実績		実績コメント	成果と課題(内部評価)	展示・上映全体の 評定意見	評定
		入場者数	入場者数	歳出(千円)	歳入(千円)				
幕末・明治期の川崎とニッポン展	博物館	4,200	3,240	4,299	954		出品資料9割が収蔵品であったこと、また美術資料も多く展示したことで、ミュージアムの特徴が出せた。その一方で、総入館者数が予定数より約1000人下回った。広報面での強化、特に市民への周知が課題として残った。	(展示(企画展等、常設展)) 限られた予算の中で、工夫をしながら市民ミュージアムならではの特長のある展示会や上映会を企画・実施した点を評価したい。とりわけ、多くの博物館・美術館の常設展示が、個性が乏しく、マンネリ化していると言われている中で、メッセージ性が強く、館の独自性があり、有意義な常設展示を行っていることを評価したい。とりわけ、企画展「昔のくらし・今のくらし」は、館の収蔵品を活用した展示を核に、教育普及活動やレストランでの関連企画などにより、ミュージアムの展示を市民に身近なものにし、観客間で会話がはずむきっかけをあたえた意義のある企画であった。	B
ハービー山口展	美術館	11,000	7,064	5,295	2,277		作家のトークイベントを数多く行い、多くの来館者の参加を見た。作家自身がマスコミで宣伝に力を入れてくれた。		
サンデー・マガジンのDNA展	美術館	11,000	6,840	9,253	3,155	戦後文化を形成した週刊少年漫画誌の歴史をわかりやすく展示。	漫画雑誌史展は初の試みとして評価を受け、漫画分野を擁する当館の独自性を強調。一方で、入館者数が目標であった1.1万人を達成しなかった。広報面での課題はもとより、企画自体の成り立ちから再考する必要がある。		
「川崎・縄文・1万年	博物館	6,200	5,335	5,741	878		アンケートに、身近に文化財が存在することを知った、という意見が多く、開催趣旨にある身近な歴史や文化財の理解を深めてもらう、という展示会の目的の一つに適った成果を出すことができた。また、実際に資料に触れるコーナーの評判が良かった。反面入館者数や図録の売り上げが伸びず、全国的な歴史の中に地域の歴史を盛り込む形で展開することなど、内容面の今後の工夫が必要である。		
灯りの情景展	博物館	6,000	6,781	6,938	779		当館収蔵の灯火具コレクション約2000点の中から厳選した500点により、日本の燈火史を展示した。時代ごとの灯りのある情景を、錦絵や体験コーナーなどで紹介し、好評を博した。入館者数は目標(6000人)を達成したが、収益が低かったことは課題である。当館が優れた灯火具コレクションを有していることを全国にアピールすることができ、コレクションの寄贈者(遺族)から感謝され、有意義であった。		
川崎フロンターレ展	学芸室	10,000	6,090	2,799	137		毎年恒例の展示であるが、今回は実物スパイクの展示などを行い、好評を得た。一方でフロンターレ側との調整がうまくいかず、展示などの作業時間がかかるなどした。また公的予算の執行という立場からも、今後はフロンターレとの役割分担を明確化すべきであろう。		
昔のくらし・今のくらし	博物館	5,000	16,921	850	—		例年行っている収蔵品による展示会である。今年も多くの新たな資料を展示することが出来た。給食の企画のためか、会期当初からメディア露出が多く、例年に比べても入館者が伸びている。		
安田鞞彦展	美術館	10,000	3,099	5,200	—	開館以前より収集してきた安田鞞彦の作品を公開。(実施3/13より)	ニューオータニ美術館との共催により、新たな来館者を開拓。二館それぞれの入場券半券提示により観覧料を割引。		
かわさき市美術展	美術館	10,000	7,829	—	—		※重点項目評価シートに記述		
星野富弘展	教育普及	30,000	13,271	6,772	2,012				
創造する子ども展	教育普及	3,000	3,975	—	—				
中学校美術造形展	教育普及	1,000	1,861	—	—				
中学校技術家庭科展	教育普及	1,000	550	—	—				
土日祝日の定期上映	美術館	15,000	12,446	15,804		担当学芸員の休職により、後半は企画の内容を収蔵品を中心としたものに変更している。	毎週末の上映が定着した感がある一方、客層の偏りが顕著に。若年層への働きかけと他との連携等での一層の顧客層開拓が今後の課題として残る。 【上映事業全体について】 収蔵品の定期的な公開と上映機会に恵まれない作品の上映を通して、フィルム文化への意識を深め、映画の持つ幅広い表現の一端を紹介できた。一方で、市民ニーズの高い作品を公共上映館という枠組みの中でいかに上映し、集客に繋げていくかが課題として残る。		
版画の技法・ポスターの印刷技術	美術館					リトグラフの技法と代表的作家の作品をわかりやすく紹介した。	【アートギャラリー事業全体について】 1.展示時期を三ギャラリー同一にし、経費をスリム化。かつ展示回数を増加させた。切り詰めた分では展示具倉庫の改修や作品整備費にあてた。 2.美術館の新たなコンセプトをアピールする企画として「歪んだ瞬間 -メディアとアート-」を実施。このラインの展示会を継続実施し、独自のスタンスでメディア芸術にアプローチしていく。 3.全体の展示をとおして、ミュージアムのコレクションの豊かさを伝えることができた。より幅広く伝えるためには広報の充実を図る必要がある。 4.限られたコレクションをさらに生かすためには、コレクションを継続的に補充・拡張していく必要がある。また、コレクションの素材に応じた展示具の拡充が必要である(例えば、岡本かの子の文学資料等)。 5.ポスター展での印刷道具の資料展示、写真展での雑誌「週刊朝日」の表紙(篠山紀信の仕事)の展示、現代の先端的表現を紹介するためにゲストアーティストを招くなど、コレクションの展示に工夫を加えた。展示の工夫をさらに加えていく。 6.ギャラリー・トークの定例化の試みを第四期で行った。次年度より定例開催を定着させるとともに、トークの実施の機会を増やしていく。	(上映) 上映は、全国の博物館の中でも類例がほとんどないユニークな事業であり、コアなファンを確保している。民間では実施が困難な事業を継続的に実施して点を評価したい。 上映事業を更に充実し、市民ミュージアムの存在価値を高めていくために、実験的な映画・映像をもっと強力にアピールすることやテーマの設定、上映日程(要望の多い作品の複数回の上映を含む)、周知方法の工夫が行われることを期待する。また、平成生まれが成人する時代になり、第二次世界大戦前、戦争中、戦後の高度成長の時代などの日本社会、日本人の様子を次世代に継承・伝達することが課題になりつつある。市民ミュージアムには、戦前、戦争中の「ニュース映画」等を積極的に収集・公開することを期待したい。また、外部団体との連携により、非商業映画やプライベートフィルム等を上映する企画の実現も期待したい。	B
写真家・宮武東洋展	美術館					宮武東洋の映画の国内ロードショー上映と連動した展示。コレクションを生かした。			
岡コレクションより開港前後の版画展	美術館					収蔵品の岡コレクションを企画展「幕末・明治期の川崎と日本」展と関連させて紹介することができた。			
1960～1980年のグラフィック・写真・マンガ						サンデー・マガジン展の時代に合わせた三つの展示会。展示解説を行った。キャプション等見やすい展示を心がけた。			
①変革の渦	美術館					1960,1970年前後の日本のポスターを展示。アングラ時代に焦点をあて、関連資料も紹介した。			
②熊切圭介写真展						学芸員のと展示解説に加え、作家のトークショーを行った。			
③女性を撮る						写真作品のみでなく、篠山紀信が撮った女性による「週刊朝日」の表紙の展示も行った。			
歪んだ瞬間 -メディアとアート- [未来派、構成主義、バウハウス、現代作品から探る]	美術館					練り直した美術館のコンセプトを打ち出す機会と捉え、コレクションを用いてメディアとアートの関係とその歴史を示す展示にした。			
グラフィック'55の作家たち	美術館					所蔵品によって1955年に開催されたグラフィック'55展の作家のポスターを紹介した。			
岡本かの子 その母性と母性像	美術館					川崎市ゆかりの作家、岡本かの子の著作物や資料を「母」をテーマに展示			
マンスリー展示	博物館					3月までに12回の展示を行った。常設展示の一部のため、実数は不明。	毎月第3土曜日に行っているマンスリートークも定着し、固定客が増えた。一方で70回を越え、企画にも新しい展開が必要になってきている。		

※年間総利用者数:172,853人(対前年▲3,951人)